

## 第2回周南市地域とともにある学校づくり推進協議会 会議要旨

開催日時：令和8年2月20日（金） 15:00～16:30

開催場所：周南市シビック交流センター2階 交流室1

主催者：周南市教育委員会 学校教育課

参加者：周南公立大学地域共創センター副センター長、小・中学校長会長、公立学校教頭会代表、地域連携担当教職員研修会企画委員会代表者、学校運営協議会会長、PTA連合会代表、地域学校協働活動推進員代表、周南市役所関係各課担当者

### 1 開会行事

主催者あいさつ（周南市教育委員会学校教育課課長）

### 2 学校教育課所管説明

（1）今年度の成果と課題について

- ・令和7年度の地域連携の方向性とCSアクションプランについて
- ・令和7年度の地域連携の取組について
- ・コミュニティ・スクールに関するアンケート調査について

### 3 グループ協議・発表

協議テーマ「『持続可能な地域連携』にするためのアイデアを出し合う」

協議内容の共有

#### ○Aグループ

- ・子どもたちの「やってみたい」という思いを、まず大人が受け止める姿勢が大切である。
- ・総合的な学習の時間などで子どもの思いや願いを実現するためには、教職員が地域の人・もの・ことをよく知ることが重要である。必要に応じて、地域の人や資源と子どもをつなげられることが求められる。
- ・そのためには、学校と地域、また地域同士がつながる機会を大切にすることが必要である。
- ・子どもの思いを支える環境をつくっていくことが、持続可能な地域連携につながる。

#### ○Bグループ

- ・可能な地域連携を進めるには、まず少人数からつながりをつくり、そこから人を広げていくことが大切である。
- ・取組を続けていくためには、参加した人が楽しい、おもしろい、またやりたいと感じられることが重要である。
- ・運営する側自身が楽しみ、その楽しさややりがいを次の担い手に引き継いでいくことが、持続可能性につながる。
- ・声の大きい人だけでなく、意見を言いにくい人や声の小さい人の意見も大切にする工夫が必要である。そのために、ICTを活用して多様な意見を集め、整

理することも有効ではないか。

- ・ 地域の特色や誇りに思えるものを明確にし、それを中心に取組を進めることが大切である。
- ・ 「やらなければならないからやる」のではなく、参加したい、自分も関わりたいと思える魅力ある取組にすることが重要である。

#### ○Cグループ

- ・ 地域連携に関わる人材が固定化していることが課題である。
- ・ 特に、保護者は子どもの卒業と同時に学校とのつながりを失いやすく、次の担い手育成をどう進めるかが重要である。手立てとして、PTAで関わった人がコミュニティ・スクールの役員等へつながっていく流れをつくることが考えられる。
- ・ 学校行事では、地域の人に参加しやすいように、文化祭で地域の発表を取り入れることも案として出された。
- ・ 子どもの卒業後も保護者の関わりが続くように、保護者のサークル活動など、継続して参加できる場を残すことの大切さが共有された。
- ・ 関わる大人の役割や責任が重いと参加しにくいいため、気軽に参加できる場を設け、関わるハードルを下げる必要がある。
- ・ 多くの人が集まる中で、10人に1人でも次の活動の担い手が見つかればよいという発想で、裾野を広げることが大切である。
- ・ 活動の中に、多様で小さな役割を用意することで、忙しい人でも関わりやすくなるのではないか。
- ・ 活動を熱心に進めるほど、大人主体になり、子ども中心の視点が薄れやすいという課題もあるので、担い手を増やすことに加えて、大人が常に子どもを中心に考える意識をもつことが重要である。

#### 4 講評：山口県教育庁 地域連携教育推進課 主査 内山 知憲 様

子どもと大人が対等な立場で関わる大切である。便利な社会では、人と関わらなくても生活できる一方で、人と関わる楽しさや、手間をかけて何かをつくることの価値を感じにくくなっている。そのような中で、地域連携に関わる人たちは、人と関わることや、手間の中にある楽しさや価値を知っているからこそ関わっているのではないかと感じた。

また、思いは目に見えないものであるため、言葉や表情、態度で互いに伝え合い、相手の声をしっかり聞くことが、次の担い手の育成や持続可能な取組につながる。さらに、活動は形だけを無理に継続するのではなく、「いつやめてもよい」という柔軟さを持ちながら、形ではなく思いをつないでいくことが大切である。

子どもたちにとっても、前例を続けること以上に、自分たちの思いや願いが形になることに価値があるため、「何をしたいのか」という思いを丁寧に受け止め、その価値を多くの大人に伝えていくことが大切である。

講評：徳山エリアCSチーフ 長谷川 敬 様

学校の先生、地域の方、行政の方が顔を合わせて協議すること自体が非常に大切であり、その積み重ねによってアクションプランも着実に深まっている。

地域連携を進める上では、学校の学びを授業の中だけで終わらせず、地域や社会につなげていくことが重要であり、その中で子どもたちが地域の多様な大人と出会い、対等な立場で関わりながら、自分自身の可能性やロールモデルを見つけしていくことに価値がある。

持続可能な地域連携を考える上では、取組の目的や内容をあらためて見つめ直し、本当に子どもの育ちにつながっているか、大人にとっても学びになっているかを問い続けることが大切であり、完璧を求めすぎず、ときにはやめることも含めて柔軟に考える必要がある。

合わせて、若い世代や保護者、卒業生、大学生などを意識的に巻き込み、次の担い手を育てていく視点も重要である。持続可能な取組を支える「ガソリン」は、感謝、つながり、そしてやってよかったという実感であり、子どもも大人も無理なく、楽しく関わることが継続につながる。

## 5 閉会行事

周南市地域とともにある学校づくり推進協議会長あいさつ

～周南公立大学 地域共創センター 副センター長 立部 文崇 様～

地域連携教育は、子どもの学びの側からその意義を捉え直すことが大切である。教室や教科書の中だけで得た知識だけでは、本当に「理解した」とは言い切れず、地域の人や社会と関わりながら学ぶことによって、知識が実感を伴ったよりリアルな学びにつながっていく。

これからの社会を生きる子どもたちにとって、人と連携しながら生きることの意味を考え、体験する場としても、地域連携教育には大きな価値がある。

「持続可能な地域連携」というテーマは大人側の課題として語られやすく、子どもにとっての課題や意味が十分に見えていない面がある。だからこそ、子どもにとって地域と連携することはどのような意味をもつのか、また、子ども自身がこの取組をどう受け止め、どう評価しているのかを考える機会を設けることが大切である。さらに、周南市の大人たちが子どものために熱意をもって関わっていることを、子どもたち自身にも伝えていくことが大切である。